

言語論哲学の基礎を求めて

—ヴィトゲンシュタイン研究〔I〕—

山 口 勲

語ることのできないことについては、沈黙しなければならない。

《論理哲学論考》 (7)

ヴィトゲンシュタインの前期の哲学は、《論理哲学論考》に集約されている。後期の哲学は、《哲学研究》に代表されている。そして前期は、論理実証主義の結成と展開に強い刺激を与えた。後期は、分析哲学の問題形成と発展に大きな影響を及ぼした。

しかしヴィトゲンシュタイン自身は、自分の哲学が論理実証主義と日常言語学派のどちらの方向に解釈されることにも、絶えず強い不満を懐き続けた。《論考》から論理実証主義への展開、また《研究》から分析哲学への展開には、それぞれ何か大きな脱落があるのではないか。

前期と後期とに、別々のヴィトゲンシュタインがいるはずがない。ヴィトゲンシュタインの哲学には、深く人格にかかわる、自分自身を生きた哲学の素材とする何ものかが、深く潜んでいるのではないか。

もしこの何かを解き明かす糸口でも見付けることができれば、そこから我々は、論理実証主義に脱落している《論考》の意図と、日常言語学派に脱落している《研究》の意図とを結びつける基礎の解明に迫ってゆけるかも知れない。

本稿はこの問題を、まず〔I〕として《論考》の側から追求し、次回に〔II〕として《研究》の側から追求する。しかる後に、できれば〔III〕として、〔I〕と〔II〕の共通的な基礎の本質に迫ってゆきたいと考えている。

〔I〕

《論考》の本文は、ズールカムプ社版の大判で72頁あり、7つの論段に分れている。この各論段は、たとえば第一の論段は、1, 1・1, 1・11, 1・12, 1・13, 1・2, 1・21の論点に区分され、第二の論段は、2, 2・01, 2・011, 2・012, 2・0121, 2・0122, 2・0123, 2・01231, 2・0124……の論点に細分されている。そして小数の付かない各論段が最も重要で、小数が入りそれが細分されてゆくにつれて、後の論点は前の論点より重要度が少なく、附随的な細則になってゆくよ

うに構成されている。

ところで、第7論段だけは、〈7〉ひとつで、小数点以下に区分される論点はなく、そしてこのただひとつだけの論段が、《論考》の結論となっている。しかもこの第7論段の意味を、《論考》全体の文脈の中でいかに理解するかが、《論考》の、そしてヴィトゲンシュタインの哲学の謎を解く鍵となっているのである。

第7論段は、1行で、以下のように簡潔に表現されている。

「語ることのできないことについては、沈黙しなければならない。」

論理実証主義は、これを次のように読む。「語ることのできる ことについてしか 語りえない。語ることのできる ことだけが学問的価値をもつ。故に語ることのできないことについては、沈黙しなければならない。」

この解釈によって、論理実証主義は、1)《論考》の1と2の論段の中心をなす写像理論の形而上学的性格を剥奪する。写像理論は、言語と実在または命題と世界との結合(対応)関係を扱うが、論理実証主義は《論考》のこの形而上学を無視する。2)論理実証主義は、《論考》の写像理論を無視することによって、3~6・3までの中心議論を1, 2と切り離して、これをトートロジー(恒真命題)の真理関数と経験命題の検証理論の問題とみる。3)論理実証主義は、《論考》の1, 2の写像理論の形而上学を否定すると同時に、6・4以下で扱われる倫理、宗教の問題を、それ以前の文脈と全く関係のない単なる挿入と考えることによって、価値の形而上学をも否定した。《論考》は、倫理や宗教と無関係の書だとみる。

こうして論理実証主義は、《論考》から真理関数(命題論理学)、検証理論、理想言語(人工言語)、二重の意味での形而上学の否定、を引き出した。《論考》全体の主題を、論理学、数学、科学基礎論にあると考えるのである。

しかしその後の論理実証主義それ自体の発展は別として、《論考》の第7論段の解釈は、論理実証主義の読みが正しいであろうか。

[II]

ヴィトゲンシュタインは、1919年の9月~10月頃に、L・フォン・フィッカーへ宛た手紙で、《論考》の意図を次のように解説している。

この本の問題点は、倫理的なもの(an ethical one)である。私はかつてこの本の序文に、ある文章を入れようとした。しかし、それは、現に実際、そこに入れられてない。だが私はここで、あなたのためにその文章を書いておきたい。その文章は、おそらくあなたにとってこの本を理解する手掛りとなるであろうから。

私の入れようとしたのは、当時こういうものであった。私の著書は、二つの部分から成っている。一つは、ここに提出された部分であり、他の一つは、私が書かなかったものの全てである。そして重要なものは、まさにこの第二の部分なのである。私の本は、倫理的なものに、いわば内側から限界をつけるのである。そして私は、この方法こそ、こういった限界づけをする唯一の厳格な方法であると確信している。要するに、私はこの本において、多くの人がいまちょうど無駄話をしている事柄のそのすべてに、沈黙を守ることによって、しっかりとした場所を与えたと信じている。——そこで私はあなたに、この本の序文と結論を読むことをすすめたい。序文と結論とは、この本の問題点を最も直接的に表現しているからである註)。

ヴィトゲンシュタインはこの引用文で、次のことを明かにしている。

- 1) 《論考》の意図は倫理的なものである。
- 2) 《論考》は二つの部分から成る。一つはこの《論考》であり、他の一つはここに書かなかった部分である。そして重要なのは、書かなかったこの第二の部分である。
- 3) 書いた《論考》は、ここに書かなかった第二の部分（倫理的なもの）に、書いたことの内側から境界を付けるのである。
- 4) 《論考》は、倫理的な事柄に、沈黙を守ることによってしっかりとした場所を与えたのである。
- 5) そしてヴィトゲンシュタインは、引用文の最後で、《論考》の問題点はこの本の序文と結論で最も直接的に表現してある、というのである。

それで《論考》の序文の該当すると思われる箇処を探すと、次の表現が出てくる。

「およそ語られうるものは、明瞭に語られうる。そして論ずることのできないことについては、沈黙しなければならない。」

そして《論考》の結論は、すでに引用したように

「語るることのできないことについては、沈黙しなければならない。」

では実際に《論考》の中で、この書物の意図はどのように実現されているのかを検討してみよう。

〔Ⅲ〕

ヴィトゲンシュタインにとって、哲学の目的は何であるか。彼はいう。「哲学の目的は、思想の論理的な解明である」(4・112)。そこで「哲学は、思考可能なものの限界を定め、そうすることによって思考不可能なものの限界を定めねばならない。哲学は思考可能なものを通じて、思考

不可能なものを、いわば内側から限界づけなければならない」(4・114)。

ヴィトゲンシュタインの哲学は、まず思考可能なものの限界を定め、そうすることによって思考不可能なものを、思考可能なものの内側から限界づけようとする。

しかし彼の哲学の目的は、言語を用いなければ果せない。ヴィトゲンシュタインは、序文でもすでに次のように説いていた。「だからこの書物は、思考にある境界線を引くこと、というよりむしろ思考にではなく、思想の表現に境界線を引こうとする。思考に境界線を引くためには、我々はこの限界の両側を考えることができなければならないからだ。(そうすると我々は、考ええないものを考えねばならないことになるであろうから)。そこでこの境界線は、言語のなかでのみ引かれうるであろうし、境界線の彼方にあるものは、端的に無意味となるであろう。」

ヴィトゲンシュタインの哲学は、言語の哲学なのである。彼は再び序文で、すでに次のように書いていた。「この書物は、哲学の諸問題を扱っている。そして私の信ずるところでは、哲学の諸問題が提起されるのは、我々の言語の論理の誤解に基づくことを示している」。ヴィトゲンシュタインは、哲学によって言語の論理を解決しようとし、逆に言語の論理によって哲学の諸問題の混乱を解消しようとしている。

それでは、彼は言語をどのようなものと考えていたか。これは重要なことであるが、ヴィトゲンシュタインが一般に言語というとき、それは日常言語を指している。《哲学研究》のヴィトゲンシュタインも、言語とは日常言語のことだと考えていた。しかし《論考》のヴィトゲンシュタインは、日常言語はこのままでは誤解されると考える。「日常の言語では、同じ単語がさまざまな仕方で記号の表示を行なう——だから異なったシンボルに属する——ことが非常に多い。また相異なる仕方で記号の表示を行なう二個の単語が、外見上は同じ仕方で命題の中に用いられることも多い」(3・333)。「こうして、最も基本的な混乱が容易に生じることになる(哲学のすべてがこのような混乱に満ちている)(3・324)。そこでヴィトゲンシュタインは、言語の機能を限定する。「この誤りを避けるためには、我々はある種の記号言語を採用しなければならない——だから論理的な文法—論理的な構文論—に従う記号言語を採用しなければならない」(3・325)。「言語の論理を日常言語から直接に取り出すことは、人間には不可能である」(4・002)。

かくてヴィトゲンシュタインは、日常言語は記号言語を採用することによってその混乱から解放されるし、哲学上の諸問題も言語の論理の誤解に基づくのであるから、記号言語の採用によって解消されてしまうと考えた。

では彼は、記号言語の論理空間をどのようにして構築するか。《論考》の1と2の論題は、主に写像理論を扱っている。写像理論は、論理空間の構築にいかなる役割を果しているか。

言語の最も基本的な単位(形式)は、最も単純な命題、すなわち要素命題(原子命題)である。実在の側でこの要素命題に対応するのは事態(Sachverhalt)である。事態とは元来、物の在り方を現わしている。そして要素命題を分解すれば名辞(原子記号)、これに事態を分解すれば物(論

理的原子)が対応するが、いずれも論理的要請である。また逆に、要素命題を結合すれば複合命題(分子命題)、これに事態を結合すれば事実(Tatsache)が対応する。従って言語の側で、名辞—要素命題—複合命題—命題の総和の段階は、世界の側で、物—事態—事実—世界の総体の段階に対応する。だからすべての要素命題を挙げれば、世界は完全に記述されうる。

更にこの写像理論の形而上学は、《論考》の至る所に浸透している。

「論理形式、いいかえると実在の形式である」(2・18)

「命題とは、世界と投影関係にある命題記号のことである」(3・12)

「命題は、実在の写像である」(4・01)

「私の言語の限界は、私の世界の限界を意味する」(5・6)

「論理は世界を満している。世界の限界は論理の限界でもある」(5・61)

ヴィトゲンシュタインの写像理論は、世界の限界は論理の限界であるとして、世界と論理を一致せしめる。そして《論考》の各部分で扱われている論理学(真理関数、命題論理学)、数学、科学論は、この論理言語(記号言語)の限界内で、語りうるものを明瞭に語りうるための用具の役割を果たすことになる。写像理論—真理論としての形而上学を、内側から限界づける役目を果たしているのである。

だから論理実証主義のように、これらの用具だけを独立に採り出し、写像理論の形而上学を否定してはならない。ヴィトゲンシュタイン自身が後に、《哲学研究》で写像理論を自ら否定するのは、全く別な根拠、すなわち彼の言語観(言語=記号言語)の考え方を全く改めたからである。

ヴィトゲンシュタインの哲学は、〈言語批判〉である。しかし《論考》の言語は、記号言語である。この記号言語は、写像理論の語りえた論理空間の境界線を明瞭にする。この写像理論の形而上学の世界こそ、語られうるものは明瞭に語られうる領域なのだから。

ヴィトゲンシュタインがもし《論考》のこの〈第一の部分〉に成功したとすれば、彼はそれによって語ることはできない〈第二の部分〉をどのように扱っているのか。

[IV]

ヴィトゲンシュタインはいう。「すべての命題は同等の価値をもつ」(6・4)。命題はすべてトートロジー(恒真命題)なのだ。「世界の意味は、世界の外側になければならない。世界のなかでは、すべてはそのあるがままにある。そして、すべては起るがままに起る。世界のなかには、いかなる価値もない。——仮に価値のある価値があるとすれば、その価値は生起するすべてのもの、そのようであるすべてのものの外側になければならない」(6・41)。「それゆえ、倫理学の命題もありえない。命題はより高貴なものを表現することはできない」(6・42)。「倫理学は言葉で表わ

せないことは明かである。倫理学は超越的である。倫理学と美学とは一つのものである」(6・421)。「倫理的なものの担い手である意思については、語ることはできない」(6・423)。

《論考》の中で、6・4以下はそれ以前と様子がちがう。6・4以下は価値、倫理、意思、死、神秘、等の問題を扱っているが、これらの問題は等価値的な、トートロジーを語る命題に属さない。倫理学の命題はない。倫理学は命題の形で言葉になしえないのだ。《論考》は、倫理、宗教の問題を積極的に前面に押し出して論じることをせず、あくまで〈命題〉の形で明瞭に語りうる領域を、その内側から限界づけ、それによって言語の外側にある行為の世界にその場所を残したのである。

《論考》の主に1と2の論段で扱われる写像理論—真理論としての形而上学は、6・4以下で示される行為の世界と境界線で接している。そして6・4に至るまでに語られる論理学、数学、科学論は、真理論としての形而上学の世界を、その内側から明瞭に語り、その範囲、限界を明瞭に規定する。哲学はこうして、語りうることは明瞭に語り、それによって語りえない領域を指し示す。

従って論理実証主義が、《論考》から形而上学の否定、理想言語、検証理論、等の問題を前後の文脈との関連なしに引き出したのは、ヴィトゲンシュタインの真意とは無縁である。

かつてカントの《純粋理性批判》は、数学と自然科学の基礎づけをする書物と考えられたが、その反面、だから形而上学を否定する書物であると誤解された時期があった。しかし現在では、この書物の意図は第二版の序文の中にあるように、「信仰に場所を開けるために知識を取り除く」ことにあるとみるのが定説になっている。《純粋理性批判》は、第一に純粋理性の能力(悟性)の範囲をその内側から明瞭に限界づけることによって、そこに自然の形而上学を構成した。そして第二に、そうすることによって倫理や宗教の領域に余地を残し、将来の道徳形而上学の構築に備えたのである。

ヴィトゲンシュタインの《論考》は、思考(悟性)によってではなく、一つの思想の表現(記号言語)によって、《純粋理性批判》とまさに同じ課題を果そうとしている、とというのである。

従って《論考》の第7論段の意味は、論理実証主義の解釈とちがって、次のように読める。

「語ることでできることについてしか語りえない。しかし語りえないものこそ論じる価値をもつ。だから語ることでできないことについては沈黙しなければならない。」

[V]

ヴィトゲンシュタインは、《論考》の第一の意図を達成した。彼らはこの達成によって、いわ

ば〈梯子を登りつめた後で、その梯子を投げすて〉(6・54)るのである。そして彼は、世界の限界、論理の限界の彼方に倫理の領域を示すことができた。第一の意図の達成は、同時に第二の意図の達成を予示した。

そこでヴィトゲンシュタインは、《論考》(1918)を書いた後、哲学から離れた。1919年9月、ウィーンの師範学校入学、1920年9月からウィーンの南のいくつかの寒村で教員生活に入り、1926年4月まで続ける。自然や音楽に親しみ、建築の設計や彫刻にいそしむ。もともと彼はリンツの実科学校を卒業、マンチェスター大学工学部で航空工学を研究しているように、哲学を研究する以前から、実際の学問、実践的活動に積極的な関心を示していたのである。

ところが彼は1927年、シュリック、ヴァイスマン、カルナップ等と逢うようになってから、次第に哲学の問題に関心を戻し始めた。そして1929年、ケムブリッジで再び学窓生活に入る。彼は後に、《哲学研究》の序文で書く。「16年前、再び哲学の仕事に従事するようになって以来、私はあの最初の本の中で書いたことのうちに、重大な誤りのあることを認めなくてはならなかった」。そして《論考》の序文では、彼の思索に刺激を与えてくれた人として、フレーゲとラッセルの名を挙げているが、《哲学研究》の序文ではフランク・ラムゼイとP・スラッファーの名を挙げる。

なぜこのような転換が、ヴィトゲンシュタインに起ったのであろうか。次の研究課題のために、推察と予想を立てておこう。

彼は言語の基本を日常言語と考えている。そして彼は哲学によって言語の論理の誤解を解決し、言語の論理によって哲学の諸問題の混乱を解消しようとした。彼はこの目的を、日常言語を記号言語に組み換えることによって果せると思った。そして彼はこれに成功したと信じ、〈梯子を登りつめた後でその梯子を投げすて〉、哲学から離れ実践活動に入った。しかし彼の実践活動の体験は、日常言語を記号言語に組み換えることによっては解決できない多くの言語のあることを、彼に気付かせた。日常言語はラッセルやフレーゲの言語観でなく、ラムゼイやスラッファーの示唆する言語観でこそ、より明瞭に捉えられるかも知れない。

そこで我々は、ヴィトゲンシュタインの哲学、《論考》の言語観、および《哲学研究》の言語観の三つの関係を、あらかじめ次のようにまとめておく。

1) ヴィトゲンシュタインが《論考》の誤りとするものは、日常言語に対する捉え方のちがいである。《哲学研究》の言語は、記号言語でなく用法的言語、いうならば文脈的言語として捉えられた。

2) 重要なことであるが、《論考》の〈語ることのできないこと〉は、《哲学研究》では〈記号〉言語の外側にではなく、〈用法的言語〉の底に深く沈められた。

3) 人間の生は、この語りえぬ実践的行為の主体として、言語の底に言語を収斂して活動する主体となった。

従って《哲学研究》のヴィトゲンシュタインは、1)言語観を変えたが、それによって、2)〈語

りえぬこと〉を言語の外側におかず、言語の内側の、言語の底へ開示し、3)言語とその基底に生
きづく倫理との関係を明かにしようとする。

《哲学研究》のヴィトゲンシュタインは、《論考》の言語観を改めたが、語りえぬ倫理的なものを追求する彼の哲学の目的は、決して変えてはいないのである。この予想を、《哲学研究》の側から追求し明かにすることが、我々の次の課題となる。

〔註〕

P. Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein with a Memoir, Basil Blackwell, Oxford, 1967. p. p. 143—144.